
36度

ミスタ〜forest

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

36度

【Nコード】

N3077A

【作者名】

ミスタ〜forest

【あらすじ】

僕と、彼女と、エアコンと、それだけの話。

とある夏の日。

僕は、家に帰ってすぐ、エアコンをつけた。

エアコンが吐き出す冷たい風が、じわじわと部屋を冷ましていく。

「まったく……あいつってば、

人が見てるのに平気で抱き付いてきやがって……ちょっとは恥ずかしがってるの」

愚痴の様な、言い訳の様な、惚気話の様な独り言を呟いて、僕は冷風に身体を晒した。

あいつと一日を共にすると、必ずこうだ。

あいつと一日を共にするようになってから、ずっとこうだ。

それでも、この暑さ……いや、熱さは嫌いじゃない。

この熱の持ち主が、世界で一番大切な人だから。

「……今月は、電気代高そうだな……」

とある残暑が厳しい日。

僕は、家に帰ってすぐ、溜め息を吐きながらエアコンをつけた。

部屋を漂うジメジメした空気を、エアコンが飲み込んでいく。

「……女心って、難しいな……」

自嘲気味に呟いて、僕はベッドに身を預けた。

「『思い切って髪切ったのに！』って言われても……あれだけじゃ

気付かないよな、普通……」

愚痴の様な、言い訳の様な、自己防衛の様な独り言を呟いて、僕はベッドに沈んでいく。

——あの時、素直に謝っていれば良かった……。

ついムキになってしまっ、言い争いになって、そのまま帰ってきてしまった。

あの時の、あいつの泣きそうな顔を思い出し、僕は溜め息を吐く。
そのままの姿勢で、数分を過ごした後、

「……許してくれるかな……？」

僕は電話を手にした。

「……と言う訳で、これが僕の彼女だ」

とある季節の変わり目。

ベッドに横たわったまま、僕はエアコンを話し相手にする。

季節の変化に身体が付いていかず、体調を崩した為だ。

ベッドの傍では、僕の看病に疲れた彼女が、上半身をベッドに預けて眠っている。

デートを断るメールをしてから、すぐに駆け付けてくれて、
一日中僕の世話をしていたのだ。疲れて当然だろう。

お陰で、僕はずいぶん楽になった。

僕は、彼女を起こさないようにベッドを抜け出し、
予備の毛布を彼女に掛け、再びベッドに戻った。

「多分、『起きるなって言ったでしょ！』って怒られるだろうな……」

誰にでもなく呟き、念の為、弱めに暖房もつける。

効くかどうかは判らないけど、空気清浄もやってみる。

一通り彼女の面倒を済ませると、僕は一息吐いた。

彼女は、相変わらずすやすやと眠っている。

「まったく、病人の傍で寝やがって……移ったらどうするんだよ……」

聞こえていないからこそ言える事を、そっと呟く。

そして、僕は彼女の髪を優しく撫で、

「その時は……僕が一日中面倒見てやるから……」

聞かれるには余りに恥ずかしい台詞を言った。

部屋には、僕と、彼女と、エアコンの稼働音だけ。

それだけでも、今の僕には十分だった。
「うわっ!？」 お、起きてたなら言えよ! ……どの辺から起きてた？」

とある冬の日。

僕は、家に帰ってすぐにエアコンをつけた。

エアコンが吐き出す暖かい風が、凍て付いた部屋を溶かしていく。

「……ちよつと前までは、あいつが温めてくれたんだけど……」

自嘲気味に呟きながら、僕は厚着を脱ぎ捨てた。

思い出したくなくても、ふとした拍子に思い出してしまう。

あいつから『終わり』を告げられた瞬間を。

黙って受け入れるしか無かった僕を。

その度に、僕は激しい虚無感に襲われる。

今の僕は、只生きているだけだ。

……いや、生きている様に見えるだけで、同じ毎日と同じ様に淡々とこなしているだけだ。

似ているけれど、『生かされる』のは、決して『生きている』とは言わない。

冷たくなった僕の手を、『温めてあげるね』と言って、更に冷たい両手で包んでくれたあいつの温かさは、今は別の手の為にある。

判っている筈なのに。

解っている筈なのに。

あいつを失って、尚更電気代は高くなった。

とある夕暮れ。

ふと僕は思い立って、エアコンをつける。

設定温度は、あいつの体温。

部屋が、たちまちあいつと同じ温かさに満たされた。

「こ……こんなに暑かったのか……」

ようやく、僕は当たり前の事に気付く。

全身から汗が噴き出し、全身が鉛の様に重くなり、意識が霞んだ。これ以上は不味い、と本能が訴え、僕は設定温度を元に戻した。

それでも、僕の心の中で、何かが満たされた気がする。

空いていた穴が埋まる様な、止まっていた何かが動いた様な、そんな感覚だった。

けどそれは、一時的な物でしかないと、何となく判った。

とある夜。

僕は、朝の七時に、あいつの体温でタイマー設定をした。

愚かな行為である事は、判っている。

未練がましい事も、判っている。

何もかも、判っている。

でも、それでも、僕はあいつの事を忘れる事が出来なかった。

あいつの居ない日々を、正常に過ごす事が出来なくなった。

始めから有った訳じゃないのに、喪失感が消えなかった。

だから、僕は、あいつに会いたい。

もう一度、あいつの体温を感じたい。

あいつと二人で迎えた朝を、もう暫く忘れないでいたい。

仮初でも良いから。形が無くて良いから。心が無くても良いから。

僕の中に残っているあいつに、もう少し寄り掛かっていたい。

電気代が元に戻るのは、果たしていつになるだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3077a/>

36度

2010年10月8日15時08分発行